〔島根女子短期大学紀要　Vol.38，51～61（2000）〕

パーシヴァル・ローエルの新書簡に関する考察

小　泉　　凡
（文化史研究室）

A Study of Recently Discovered Letters of Percival Lowell

Bon Koizumi

キーワード：ローエル，ハーン，神道，つぎ木文化，返書

1. はじめに

パーシヴァル・ローエル（1855－1916）は，一般には火星の研究や冥王星の存在を予言した天文学者として知られる人物である。一方で，1883年から1893年まで日米間を往復しながら，主として日本に滞在し，国内各地を旅して日本文化研究に従事した人物でもあった。本稿では，ローエルの新書簡を通して，後者，すなわちジャパノロジストの側面に光を当て，さらに書簡の受取人であるラフカディオ・ハーンとの交友について探ることを目的としている。

ローエルが1888年に日本研究の成果として上梓した『極東の魂』（*The Soul of the Far East*）は，明治時代の来日外国人による日本論の代表作のひとつにかぞえられるだけでなく，ハーンに来日を促した書としても知られている。ハーンはこの書を手にした時の驚きと喜びを，次のように，興奮気味に友人のグールド（G.M.Gould）に書き送っている。

> グールド！驚くべき1冊の本を手に入れました。本の中の本というべきもので，とてつもなく立派な神々しい本です。1行1行読んでいただきたい。どうやってお送りするのがいいか言ってくれないか。というのは，1字1句たりとも読み飛ばすことなく読んで欲しいからだ。『極東の魂』という名の本だが，内容の大きさに比べればこの題名は小さすぎるくらいだ。[1]

来日後も，ハーンは基本的にローエルの『極東の魂』への敬愛の念を変えることはなかった。しかし，このふたりのジャパノロジストの交友に関しては，従来，共通の友人であるB.H.チェンバレン宛の両者からの書簡中に，お互いの著書の印象や批評を書き留めたものが公表されている程度に過ぎなかった。また，ローエルとハーンの直接の面識については，A.フェノロサの娘ブレンダの回想録の中に，当時7歳の自分が同じ食卓でローエルとハーンの間に座ったという証言があることと[2]，熊本でふたりが出会ったと指摘する論考がわずかに見出されるに過ぎない[3]。

その意味で，本稿で紹介する3通の書簡はローエルから直接ハーンに郵送されたハンドライティングの未発表資料で，ローエルからハーンへの直接の文通を裏づけるはじめての証拠資料でもある[4]。これら

はローエルの1893年時点での日本観，とりわけ日本の宗教観を探る上で有益なだけでなく，やや奥歯にものが挟まったようなふたりの交友の特徴を端的に示す原資料として興味深い。

本稿では，3 通の書簡発見の経緯と書簡の体裁，翻刻と翻訳，書簡内容の考察と疑問点へのアプローチという順で論を進めることにしたい。

2. 書簡発見の経緯と書簡の体裁

この 3 通の書簡は1997年，当時東京都町田市つくし野にあった，小泉時（ハーン直系の孫，筆者の父にあたる）宅で，「八雲関係資料」と書かれた菓子箱の中から，時と筆者が偶然見つけたものである。"Percival Lowell" という美しい斜体のサインで，すぐローエルの直筆書簡と判明できた。

手紙の用箋は，ジャポニズムの時代を反映してか，いかにも日本的な挿絵が添えられ，左側を背にした左右二つ折り無罫の比較的薄手の洋紙が用いられ，各書簡の最終頁の文末数行および署名は逆方向からの重ね書きとなっている。用箋を広げた時のサイズは次の通りである。

［書簡 1］1893年 6 月 2 日付　縦17.6cm×横23.0cm
［書簡 2］1893年 6 月14日付　縦18.0cm×横23.0cm
［書簡 3］1893年 7 月 7 日付　縦18.2cm×横22.8cm

用箋の挿絵は，尾形月耕（1859—1920）という日本画家によるものである。尾形は独学で絵を学び，当時流行した人力車に蒔絵を施す作業にたずさわって以来，輸出向け陶器の下絵や新聞挿絵，雑誌小説の表題口絵，錦絵など多彩な活躍をした流行作家であった。[5] 3 通の書簡にはそれぞれ異った，尾形月耕による挿絵が付されている。1 通目は舞姫，2 通目は蛙，3 通目には遊女がそれぞれ描かれている。そして 3 通のいずれにも，付けペンによる華麗な筆跡をみることができる。なお，この 3 通の書簡は，現在，資料保存の観点から新潟県南魚沼郡大和町にある池田記念美術館に収蔵されている。

3. 翻刻と翻訳

［書簡 1］

80 Hitotsugi chō
Akasaka
Tōkyō June 2 93

Dear Mr. Hearn —

Having consulted an ichiko[6] over whether I should get a letter from you and when, she informed me that I should get one before the end of the month. I dare not inform the dear old soul, who went into a very genuine trance and bore without flinching my brutal pinches, of our common disappointment. I ought, I suppose, on strict esoteric principles to adopt Mark Twain's method of getting a letter, the penning one to the man and then not posting it. I am informed he finds it very successful.

On the whole, I prefer "l'ancien systéme" of writing again — Since writing my misterious (ママ) last I have read and annotated your "Of a Dancing Girl" and "The Japanese Smile" both of which please me, the annotations proving their suggestiveness — One of my queries is this : Is the Buddha smile native or imported ? I am inclined to think it fetched from abroad — Possibly however it is like the whole Buddhist belief which predisposition in essentials made them take so kindly to ! May it not also be said that the Japanese smile is the aboriginal child smile crystalized by etiquette ? So at least it seems to me. If you want a practical example of what you mention about Japanese art in "Of a Dancing Girl" consult a frontispiece libel by Blum in the May Scribners, if you have it not make no endeavors to get it. To fill our memories with ugly things is most pernicious —

Hoping this note will be more successful than the last — I shall register it for extra safety —

I am
Sincerely yours
Percival Lowell

東京赤坂
一ツ木町80番地
93年 6 月 2 日

親愛なるハーン様 —

あなたから手紙がもらえるのか，またいつもらえるのか，市子に相談してみたところ，月末までにもらえるだろうと教えてくれました。本格的な恍惚状態に入って，私の残酷なつねりにもひるまずにやってくれたので，お互いに失敗に終わった

ことを親切な老巫女にあえていうことができませんでした。厳格な奥義の方法からみると，私は，人が相手にペンをとり，そしてその手紙を出さないというマーク・トゥエインの文通方法を採用すべきだと思います。

概して，私は“昔のしきたり”に従って，もう一度手紙を書いてみたいと思います —行方知らずの最後の手紙を書いてから，私はあなたの，両者とも私を喜ばせてくれた，「舞妓」と「日本人の微笑」を読み，注釈をつけました。その注釈が，示唆に富む作品であることを裏づけています —私の質問のひとつはこうです：仏陀のような微笑は日本本来のものですか，それとも外来のものですか？　私は外来のものだと思いたいのです— ことによると，日本人が基本的なことにおいてそれを受け入れる傾向があり，それは，仏教信仰全体と同じようなことだと思われるのです！　日本人の微笑もまた，土着の子どもの微笑を儀礼によって磨きあげられたものと言ってもさしつかえありませんか？　少なくとも私にはそう思われます。あなたは「舞妓」の中で日本人の技芸について言及されていますが，その実例をお望みならば，5月の『スクリブナーズ』の口絵のところにあるブラムによる中傷記事をご覧ください。もし，もっていなければ，調べる努力をする必要はありません。私たちの記憶の中をこういう醜悪なもので満たすことは大変有害なことです—

この手紙が前回のものよりきっちりと手もとに届くように祈ります —念のため書留にします—

敬　具

パーシヴァル・ローエル

［書簡２］

80 Hitotsugi chō
Akasaka
June 14 '93

Dear Mr. Hearn,

I have thus written your name not in water but in sky but I think the picture not ill presents my present psychic studies — the ocean, the lotus and a frog, colored inevitably by his environment !!

Throe would have been a better thing than throw for the priest to rely or relie on — as you please — Stockton's "Assisted Fate" — you remember it — better than either. If you were here I would talk psychics to you for I think I have struck a gold mine — which like all exploiteurs I am not able to work, satisfactorily to myself — Shinto trances, god-possessions which I came upon on the top of Ontake and which I have been paddling out to the Asiatic — The land is as full of the gods as of their divine descendents. I will send you some proof shortly — Tell me more of your own work, your own smile and the Japanese one too — You have often noticed doubtless how one gets into zones of folk, with the Japanese as elsewhere. I am now in a zone of smiling Japanese having passed last winter through a zone of rascals culminating in police stations, Japanese ruined by intercourse with us — lamentabile dictu.[7]

Write me much.

Very sincerely
Percival Lowell

赤坂一ツ木町80
93年6月14日

親愛なるハーン様

このようなわけですから，あなたのお名前は水の中ではなく空に書きましたが，この絵—すなわち海があったり，蓮があったり，環境によって色を変える蛙がいる—が，私が現在やっている心的研究をよくあらわしているように思います。

お坊さんがうちかけの上に寝て苦しみを癒すよりは，苦しみのなかに寝た方がよかったのです —ストックトンの“助けられた運命”をあなたも覚えていらっしゃるでしょう— どちらがよいのかお気に召すままに。もしあなたがここにいらしたら，心的現象の話をしますが，なぜかというと金鉱を発見したからです —そしてすべての発見家と同じように金をうまく掘り起こすことができないのです— 私が御嶽の頂上で偶然みかけた神道によるトランス状態，神懸り。そしてそのことを少しずつ「アジア協会誌」に投稿しています。この国は聖なる日本国民が多いのと同じように，神々でいっぱいなのです。わたしはすぐにでもその証拠をお送りしましょう。あなた自身の研究に

ついてもっと教えてください，あなた自身の微笑や日本人の微笑についてもっと書き送ってください —日本研究だけでなく他の研究についても同じですが，民衆とのつきあい方に関して誰でもひとつのパターンに落ち込んでしまうということをしばしばお気づきになっているでしょう。私は，警察に連れていかれるごろつきや私たち西洋人によって悪くされた日本人との何とも不愉快なつきあい地帯を昨年の冬に経てから，目下，私の周囲には，にこにこしている日本人がいる，そういう地帯に入ったのです。もっと書き送ってください。

敬　具

パーシヴァル・ローエル

［書簡３］

80 Hitotsugi-chō
Akasaka Tōkyō
July 7 '93

Dear Mr. Hearn

I am sore afraid another letter to you has been lost as I have had no answer to one I sent you three weeks ago. This repeated miscarriage "no longer ceases to be funny" as an acquaintance of mine at Cambridge remarked once in a moment of more emotion than grammar — I have addressed an enquiry to the proper authorities and wait results.

This is second letter was addressed minutely enough to satisfy the most paternal goverment, I should think —

Mason tells me you are a little out of love with Shinto for gaudier Buddhism. Don't do it — Shinto is plain but of exquisite taste — In the course of my present esoteric studies I am finding much, hitherto claimed by Buddhism, to have been filched from Shinto and rechristened or reBudded as one may say of grafts. For example earlier scholars would have us believe that the charming trait of making pilgrimages to high mountains is of Buddhist inception — and that the principal peaks were "opened" by them. I have found cause to more than doubt this — Pilgrimage making in all its picturesqueness is a national, a native not an imported, trait — So is god-possession — Oh ! those Buddhists have been clever appropriators of others' goods but their day for exposure has come —

Selah[8] !

Sincerely yours
Percival Lowell

東京　赤坂
一ツ木町80番地
93年７月７日

親愛なるハーン様

３週間前に手紙を出しましたが，返事が来ないので，私の恐れることにはまたまた手紙が行方不明になったのではないかと思います。くり返される不幸は，私の知人がケンブリッジで一時的に文法に注意しないで感情的になってしまい口がすべってしまって言ったような，もはや笑い事ではなくなってしまいました —私は郵政当局に問い合わせをして結果を待っています。

２回目の手紙には，どんな官僚主義な政府当局をも満足させるに十分なほど細かく住所が記載されています。しかしどうでしょう……

メイスンは，あなたが神道に対するほとぼりが少しさめて，見かけが華やかな仏教にほれ始めていると言っています。やめてください —神道は素朴ですが洗練された趣があります。私の現在の密教研究の作業の中では，従来，仏教のものだとされてきた多くのものが，神道から盗まれたものなのだとわかりつつあります。そして，つぎ木という表現でいえるように，改名されたり，再仏教化まがいなものにされたりしているのです。たとえば，昔の学者たちは，高い山への巡礼という素敵な習性は仏教徒によって始められ，そして主峰は彼らによって開かれたと信じさせようとしたのです。これは，ますます疑わしいことだと気づきました。聖地巡礼がおりなす美しさは本来日本のもので，外来のものではないのです。—神憑りという特性についても同じです— ああ，この仏教徒たちは，よそのものをずる賢く借用してきたのですが，そのことがばれる日が来ました。

セラー！

敬　具

パーシヴァル・ローエル

3. 各書簡の考察

［書簡１］

まずこの書簡では，「ハーンからいつ返書がもらえるか，市子に相談した」という内容から始められているので，６月２日以前にもすでにハーンに手紙を書き送っていることが推察される。しかし，それらの手紙については今のところ発見されていない。

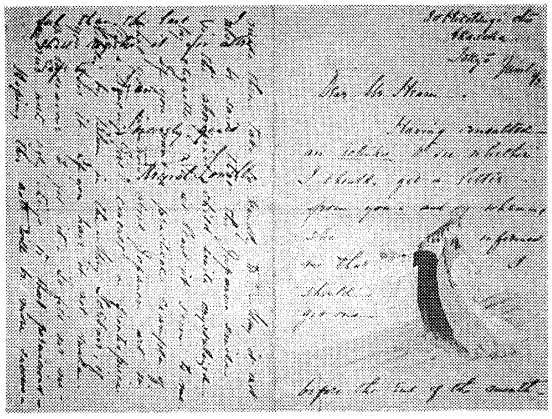

写真１：［書簡１］1893年６月２日付書簡

1）日本人の微笑は外来か

書簡の中間部から後半部では，ハーンの「舞妓」「日本人の微笑」（いずれも『知られざる日本の面影』[9] 所収）というふたつの作品に，注釈をつけながら丁寧に読み，全体として喜ばしい印象を得たことを語っている。

しかし，ハーンの「日本人の微笑」の解釈をめぐってローエルが批判的見解を抱いたことも告白されている。ハーンはこの作品で，外国人家庭に仕えていた女中が，亭主の葬式をするといって微笑みながら暇を乞い，奉公先に帰った後，微笑みながら主の遺骨を見せたことによって，その外国の婦人に思わぬ誤解と軽蔑感さえ与えてしまったというエピソードをはじめ，多くの類似した事例を示しながら，異文化コミュニケーションの難しさを説いている。同時に日本人の微笑に対して，「苦しいことや恐ろしいことを人に語る場合，その報告は当人の口から微笑をもって語られなくてはならないというのが，この国のならわしになっている」[10] という，思いやり深い弁護と共感を示した。さらに，「国民の微笑は菩薩の微笑と同じ概念を—自制と自己抑圧から生まれる至福をあらわしているのである」[11] と指摘している。このことが，当時，仏教に対する疑念が深まりつつあったローエルの心中にちょっとした攪乱をもたらし，「仏陀のような微笑は日本本来のものか，外来のものか」という質問を想起させたことが推察される。つまりローエルは，「日本人の微笑」は，仏教信仰が外来であるのと同様，日本人固有のものではないという見解なのである。

この点は，ローエルの著書『極東の魂』の骨子である，日本人の特徴は想像力の欠如による没個性，そして日本文化の特色は次々と外来のものをつぎたしたいわば「つぎ木文化」だという主張と連動していることはいうまでもない。ローエルにとっては，日本人の微笑も，やはり仏教文化とともに伝来した「外来文化」として映ったのだった。なお，ローエルの神道と仏教に対する認識については，［書簡３］の考察で述べることにする。

2）ハーンの「舞妓」とブラムの紀行文

次にハーンの作品「舞妓」は，若い絵師が山中で道に迷い，山中の一軒家に住む自分より少し年上にみえる美しい白拍子の家に一夜を借り，極貧の生活にもかかわらず厚遇を受ける。月日がたち，絵師が有名な画家になったが，ある日，ひどい身なりの老女がぼろを来て画家を訪ねる。その老女があの白拍子であることを知り，画家は求めに応じ，かつて出会ったころの美しい白拍子の姿を描く。そして，弟子にそっと後をつけさせ，川原にある貧しい家を訪ねあて，声をかけた時には息絶えていたという物語である。

しかし，この物語の前おきとして，奴隷同然として始まる芸者の一生，そして，彼女たちが，礼儀作法・遊戯・勝負事・歌・三味線・宴会や婚礼の席のとりなし・化粧の仕方など涙ぐましい努力で技芸を身に付けていること。そして宴席における客と芸者の間には常にある厳格な礼儀が保たれており，芸者が，必ずしも一般的に西洋人がイメージを抱く，性欲の対象となるような人間ではないことを説いている。

このことに関連して，ローエルが書簡中に記しているブラム（Robert Blum）の中傷記事とは，具体的には『スクリブナーズ誌』（“Scribner's Magazine”）1893年５月号に掲載された「日本のある芸術家」（An Artist in Japan）という文章と口絵にあるやはりブラムが描いた「日本の娘」と題した野卑な雰囲気の漂う肖像画を指しているものと思われる。文章中には直接日本の芸者の技芸についての言及がある

わけではないが，ブラムは日本人の案内者を“My boy”と呼び利己的と思える行動をとるなど，西洋至上主義的態度が鼻につき，全体を通して日本文化に対する認識の欠如が露呈された東京や江ノ島の訪問記としてローエルの目に映じ，それがいっそう不快な感情を助長させたであろうことは推測に固くない。

なぜなら，ローエルは大の旅行家でもあり，日本はもとより世界中を旅しているが，なかでも1889年5月には，当時まさに辺境の地であった能登半島を旅し，行く先々で見聞した食生活，宿屋のもてなし方，信越線の車内の様子，新潟県頸城地方でみた雪国特有の雁木に関する詳細な考察など，楽しく好意的なまた資料価値の高い紀行文を残したことに自信をもっていたからだ。それは，1891年1月から4月にかけて「アトランティック・マンスリー」誌に連載され，同年中にフォートン・ミフリン社から『能登—人に知られぬ日本の辺境—』（*Noto : Unexplored Corner of Japan*）として上梓され，ラフカディオ・ハーンもこの著作に対して最大級の賛辞を贈っているのである。

こういった経緯が，書簡中に，ブラムの記事を「もっていなければ調べる努力をする必要はありません」とか「私たちの記憶の中をこういう醜悪なもので満たすことは大変有害なことです」といった文言を生み出したものと考えられる。

現在富山大学ヘルン文庫に収蔵されているハーンの蔵書中にこの雑誌がないことから，ハーンがこのブラムの記事を読んでいた可能性は低いが，もし読んでいたとしても，おそらくこの点に関しては，日本人の基層文化へ深い理解を示していたハーンは，ローエルと類似した印象をもったものと思われる。

［書簡２］

1）「水」と「空」—ローエルの比喩表現

この書簡の冒頭にあるハーンの名前を「水の中ではなく空に書きました」という部分は，文字を眺めているだけでは何ら意味不明の文言だといえよう。しかし，もちろんここにはローエル特有のトリック，暗示，あるいは文通相手（ハーン）への心遣いが隠されているのだ。つまり，この書簡に使用された用箋の右下の部分には，前述したように山本月耕による蓮弁にたたずむ蛙の姿が描かれている。したがって，絵より下の部分は「水」，上は「空」と見立てられるのである。さらに，「水，蓮，環境によって

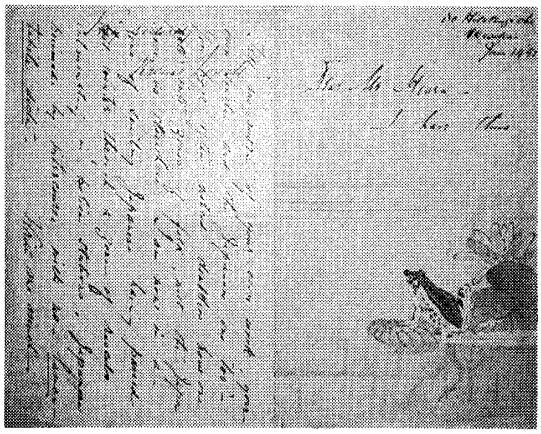

写真２：［書簡２］1893年６月14日付書簡

色を変える蛙がいる」風景をローエル自身の現在の心的研究の動向，すなわち水面すれすれのところで揺れ動き悩んでいる心中になぞらえており，逆にまたハーンの日本研究の成果を「空」＝雲の上と表現することによって，ハーンに対する最大級の敬意（世辞を孕んでいる可能性もあるが）をはらっていることがうかがえる。

これは，具体的には，ハーンが来日前後から，マルティニーク時代の成果である『仏領西インドの２年間』（1890）や小説『ユーマ』（1890）の出版をはじめ，その後，おもに『アトランティック・マンスリー』誌上に，「盆市で」（1891.９）「神々の国の首都」（1891.11）「日本最古の神社」（1891.12）「日本の庭」（1892.７）「舞妓」（1893.３）「日本人の微笑」（1893.５）など，1894年に刊行される来日後初の著書『知られざる日本の面影』を構成する主要な短編作品を続々と発表してきていることに対する好意的な評価とよむことができそうだ。

2）御嶽登山と神道研究

自分を水・蓮・そして曖昧な保護色の蛙になぞらえたローエルだが，このころからローエルの，神道研究を主とした日本文化研究の姿勢が次第に明確に打ち出されてくるのも事実である。ローエルにとってそのきっかけとなった画期的な体験は，この書簡中にも述べられている1891年８月６日の木曾御嶽の登山の際に御座の儀礼を見たことであった。「金鉱を発見した」というのもこのことを示していると思われる。御嶽信仰は，はじめは御嶽周辺の人々による山岳信仰に端を発し，中世には修験者の道場として，後に道者と呼ばれる宗教者が活躍した場所である。御嶽信仰が普及したのは江戸時代後期に覚明が

黒沢口を普寛が王滝口を開いた後といわれ，その後急速に御嶽信仰が全国的にひろまったと考えられている。具体的には「御嶽講」と呼ばれる神道系の諸集団によって支えられている。[12] そしてローエルが偶然みかけた神道のトランス状態や神懸りというのは次のような場面だったと考えられる。

すなわち，前座とよばれる神霊を統御する能力と技術を獲得した行者と，深いトランス状態となる訓練と神との接触・交流の技術を獲得した中座とよばれる，役割を異にした二人の行者が一組となって，前座が御嶽の神霊を降臨させ，トランス状態となった中座の身体にその神霊を憑依させる。そして神霊自身に変身した中座は，信者の依頼に応えて，病気治しや占いなどを行うのである。このシャーマニズム的な儀礼がローエルがみた「御座」というものである。

御座は，行者を媒介とした神霊との交流の儀礼であり，神霊は託宣や祓いの儀礼を通じて人々と交わり，いっそう神霊が超自然的な権威の所有者であることを示すと同時に，この儀礼を通じて，組織のあらゆる関係の調整や統合化がはかられるといわれる。[13]

その後ローエルは，書簡内に言及があるように，確かに1893年３月から『日本アジア協会誌』(*Transactions of the Asiatic Society*) に「秘儀的な神道」(Esoteric Shinto) の連載を始めている。そして連載の冒頭に，御嶽での前述の見聞が記されている。まだ，この書簡をしたためた時点では，「金をうまく掘り起こすことができない」でいたかもしれないが，この連載の成果は，翌年，『神秘の日本』(Occult Japan) という題で出版される。同書中でもトランスを「催眠的なもの」(hypnotic trance) と「神懸り」(possession trance) の２種に区別できると指摘している部分があるが，[14] これも書簡中の御嶽でみた御座における「前座」と「中座」の役割分担のことをを敷衍させた見解と思われる。そして『神秘の日本』がローエルの日本研究に関する最後の著書となった。この書の評価は分かれるところだが，御嶽での体験を糸口に，ローエルなりに神道の秘儀に迫るべく最大限の努力を惜しまなかったことへの評価は十分なされるべきだろう。その意味では「金の一部を掘り起こすことに成功した」といっても過言ではないと思われる。

ちなみに，ハーンが来日後初の単行本である『知られざる日本の面影』を上梓し，おおむね西洋世界で高い評価を得たのも同じ1894年のことだった。

［書簡３］

1）郵政業務への不信

冒頭では，また返事が来ないことを訝しく腹立たしく思うローエルの気持ちが，彼特有の間接的・修辞的表現を交えて吐露されている。それもハーンに対する怒りというよりは，自分の出した手紙が届かないから返事が来ない，つまり当時の日本の郵政業務の実態に対する不審と不満を募らせていると解釈できる。もちろん，深読みすれば，ハーンの筆不精という非礼に対する皮肉と解釈できないこともない。

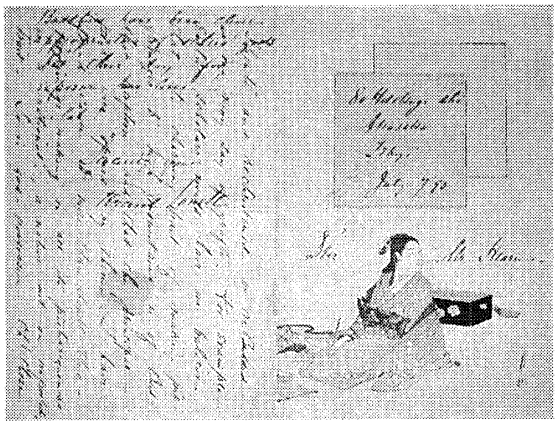

写真３：［書簡３］1893年７月７日付書簡

2）ハーンの仏教傾倒への批判

この書簡の趣旨は，ローエルとハーンの共通の友人であるメイスン[15]から，ハーンの最近の関心の持ち方が神道より仏教にウエイトが傾いていることを聞き，そのことについてハーンに厳重な忠告と批判を行っている点にある。

確かにこの頃のハーンは，松江から熊本に移って１年９ヵ月ほどが過ぎ，出雲地方に比べれば明らかに神道的環境が希薄なこの地では，むしろ地域の民俗や神道に関する資料蒐集よりは，地域性を遊離した仏教思想を含む日本人の内面生活の探求へと関心が傾き始めた時期であった。

前述の通り，ローエルはハーンの関心が仏教に傾きはじめていることをメイスンから聞いたといっている。ハーンにとって日本人女性を正式に妻として入籍しているメイスン夫妻は大きな尊敬に値する人物であり，家族ぐるみの付き合いをしていた。仕事

上でも，メイスンとチェンバレンが編者をつとめる『日本旅行案内』（*A Handbook for Travellers in Japan*）の分担執筆に関する打合せがあり，とくに1992年の後半にはメイスンとかなり頻繁に文通を行って，公私ともに心を打ち明ける間柄になっていた。その中で，ハーンが1992年7月30日に旅先の京都からメイスンに宛てた書簡の追伸で「次の2年間で，私は仏教の奥義に迫るような作品を書いてみたい」[16] と明言している部分がある。おそらく具体的にはこのようなハーンの発言がメイスンからローエルに伝えられたことが推察されるのである。

3）ローエルの神道研究—芳村正秉との出会い

次にローエルの神道に対するかくも深い思い入れである。まずハーンの来日を促したといわれる『極東の魂』（1888）には「宗教」という1章が設けられ，そのなかで次のように日本の宗教に関する概説がなされている。

> 日本人は全部，仏教徒だと言ってよいかもしれない。しかし，仏教徒とは必ずしも彼らのような人を意味するのではない。日本人が偉大なインドの宗教を採り入れた時，彼らは既に一種の迷信的な宗教を持っており，それは現在に至るまで続いている。（中略）この信仰はシャムからカムチャツカに至るアジアの海岸地方に伝わる神話にもとづく信仰である。日本では，これは，「シントウ」主義と呼ばれている。[17]

さらに同章では，仏教と神道を，ローエルの文化論のキーワードともいえる「個性」「没個性」という観点からこう分類している。

> 神道は人間自身，およびその未来については，ほとんど何も語らない。仏教は人間自身，および人間の未来について以外はほとんど語らない。従って極東の宗教を個性の観点から，または没個性の観点から考察する時，神道は主題と脈絡を持たないという理由で，本題からはずしてもよいであろう。神道が人々に与える唯一の間接的な影響は，この国の人々が生来もっている自然愛好の傾向をさらに深めていることだ。[18]

ここでの引用は，ローエルの見解の是非を問う目的ではなく，神道に対する関心の強さと理解度のバロメーターになる資料と考えたからである。同章の中で，ローエルは日本人の山岳信仰や巡礼についての言及や人間の魂についての深い関心を証明するような発言も行っているが，引用文をみる限り，1888年時点でのローエルには，神道が日本の固有信仰であるという認識は存在するが，少なくとも後年のような神道への執着や共感は存在していなかったことがわかる。

ローエルの，神道に対する学問的対象としての傾倒は，1991年以降のことだといわれる。そのきっかけとなったのは，芳村正秉（1839～1915）という神習教管長との出会いで，以後ローエルは芳村を師と仰ぎ,精力的な神道研究を行うようになっていった。芳村は津山藩士で幕末に京都に出て儒学・国学を納め，鞍馬で修行を行った。明治維新後，神祇官・教部省に出仕したが，のちに独自の神道を求めて霊山をめぐり修行した。1880年には諸国の神職・修験者らを自己の神道説で結集した講社を神道教会と称え，さらに神道神習派と改称し，教派神道一派として独立する。最終的に教名は神習教と改められた。[19] 霊山修行を重んじる芳村の神道説はまさにローエルの神道観に大きな影響を与えたといえる。そして，1993年にはやはり芳村の勧めと案内で伊勢神宮の参拝も行っている。神宮側ではローエルを丁重にもてなし，正殿内部へ立ち入る便宜もはかったといわれる。神前でのローエルは日常の研究的態度ではなく，信仰心溢れる敬虔な態度で臨み，外国人としてはじめて太々神楽を奉納したという。[20]

このようにローエルは，芳村の神道観の強い影響と自らの神道への深い共感により，日本の宗教儀礼の基層的部分は神道に属し，たとえ仏教的な巡礼であろうと，本来は神道の範疇に属するものと考えたのであろう。ローエルのいうように，確かに今日まで伝承される諸行事や儀礼の中で，一般には仏教行事と認識されているものでも，実は起源的に神道の基層となる固有の民俗信仰に基づいているというケースは少なくない。事実，民俗学者はこれを解き明かすことに日々精力を注いできたともいえる。また，日本には神仏習合の時代が永く続いたことは余りにも明白な史実である。しかし，日本の多くの宗教儀礼が神道的なものに仏教的なものが「つぎ木」（grafts）されて完成したとか，仏教儀礼は神道から盗まれたというニュアンスの表現や捉え方はすべて妥当とはいえない。たとえば盆行事のごとく，「つ

ぎ木」ではなく，両者が真に融合して日本独自の特色をもつ宗教儀礼として再創造された例も少なくないからである。

4. 返書が届かないという疑問（結語にかえて）

このように，3 通の新書簡には，『神秘の日本』の出版を前にしたローエルの神道観・仏教観が如実に告白されていることがわかる。

また，一方で実に慎重に言葉を選び，時には気取りともとれるような華麗な言いまわしやダッシュの多用，それに間接的過ぎる表現が散見されるのも，一連の書簡に共通した特質といえよう。この修辞的傾向については，チェンバレンが，1993年 1 月10日付けのハーン宛書簡で，「内緒の話」と断った上で，次のように述べていることからも，ローエルの文章作法のひとつの「癖」と解釈できそうだ。

> 私は著述家としての彼（ローエル）はもはや好きではないのです。私は彼の「凝りすぎた」文体が我慢ならないのです。変に無理をして作ってあり，いつも地口とみれば飛びつくところがあります。そしてこれが爆竹よろしく足元で爆発するので，思想に注がねばならない注意力がそこなわれてしまうのです。[21]

さらに，1893年 4 月29日付けのハーン宛書簡では，ローエルの手紙の特徴についてこのような言及もなされている。

> 昨日ローエルに会いました。彼はあなたに手紙を書いたと話しておりました。—さぞや見事な文学的文章だったでしょう。というのも，彼は手紙には大変な注意を払うからです。— 落ちをつくり，警句をはさむために，書いては書き直し，書いては書き直しするのです。普通の社交上の短信の場合でも彼がこうするのを私は見ています。—それどころか，おそらくこれは，一層奇妙なことですが，— 自分の母親に宛て手紙を書く場合にも同様なのです。[22]

この指摘は，本稿で取り上げた 3 つの書簡についても概ね該当するものといえるのではないか。若干中傷が過ぎる部分を差し引いたとしても，ローエルと最も親しく交友を続けているチェンバレンの証言は信用できるものと考えられる。

さて，そこで本題の，なぜハーンの返書がローエルに届かなかったかということである。ローエルはそもそも自分の手紙が貧弱な郵便事情ゆえにハーンに届かなかったと考えているようだが，小泉家にこれらの書簡が存在する以上，間違いなく配達されていたわけである。また，ハーンが返事を書いたが，郵便事情でローエルに届かなかったという可能性も全くは否定できないが，この頃頻繁に手紙を送っていたチェンバレンやメイスンにはきっちり配達されているにもかかわらず，ローエルだけに配達されなかったということは考えにくい。つまり，これは郵便事情によるものではなく，そもそもハーンが何らかの理由で返書を書かなかったのであろう。ハーンは一般に「筆まめ」な人といわれ，返書はもちろんのこと，積極的に文通を求めることも多かった。そうなると，「なぜ」書かなかったのか，という疑問がいっそう深まってくる。

以下に，あくまで推測の域を脱しないことを断った上で，筆者なりに考えてみたいと思う。

ハーンは，『極東の魂』を読了後，ローエルに対し最大級の敬意を抱いていたことは，次に示す書簡からも実に明らかである。

> 私はローエル氏の『朝鮮』や『極東の魂』のような見事な著作を自分が書けるなどと思うほどの自惚れではありません。精確にして繊細，言語表現の完璧な彼の著作の傍らにおいたらきっとみじめな出来ばえをさらすでしょう。[23]

しかし，そんなハーンも日本での生活を重ねる中で，前述した『神秘の日本』を批判したり[24]，あれほど手放しに賛美した『極東の魂』でさえ，日本人の折衷主義という特性を無視していることや，「没個性」をめぐる見解には，重ねて批判を加えるようになっていく[25]。

しかし,最近の里見繁美氏の論考にもあるように，だからといってハーンがローエルという人間自身をも心底から批判しているとは到底考えられないし[26]，たとえば『能登』については終始絶賛を続けていたのである。

いずれにせよ，ローエルはハーンにとってあまりにも偉大で憧れを抱くジャパノロジストであり，おまけにボストンの名門の家柄に生まれた人物でもあ

る。そのローエルの文化論の内容について，本人ではなくチェンバレンと批判的な手紙を遣り取りするうちに，いつしか一段と敷居の高い遠い存在になってしまったということはなかっただろうか。つまり，小心で自らも非常に傷つきやすいハーンが，そういう相手と対等に交友したい本音があっても，なかなかそれが実行には移せなかった複雑な心持ちが，返書を出せなかったひとつの要因ではないかということである。

また，ジャパノロジストの学会誌的性格をもつ「日本アジア協会誌」上で活躍するローエルやチェンバレンに対する屈折した思いが介在したことも考えられる。日本アジア協会は1872年，横浜在留の英米人を中心につくられ，同会誌は，日本およびアジア諸国についての知識の蒐集発表を目的とするものであった。当時，協会のメンバーになることはジャパノロジストとしての証であり，大きなステータスの獲得をも意味していた。ハーンは，1893年1月15日付けチェンバレン宛書簡で「私もいつか（アジア）協会の会員になることを考えていましたが，自分の本が出るまでは待ちたいと思います」[27] と洩らしたことがあった。「自分の本」とはもちろん1894年に出版される『知られざる日本の面影』を指すが，同書への密かな期待と，そこで活躍するローエルやチェンバレンへの羨望と敷居の高い存在感，そういった複雑な心情[28] の総合結果が，ローエルへの返書を非礼を承知の上で，控えてしまった所以ではないかと現段階では推察するのである。

5. おわりに

本稿の執筆にあたり，ローエルの華麗なハンド・ライティングの解読と翻訳作業に，予想外の時間を費やし，その分，考察や意味づけがいささか冗漫に終わったことを反省している。その困難を極めた直筆の解読と翻訳作業に際し，多忙の中を懇切なご指導や米国での文献蒐集の労をおとりいただいたオハイオ州立大学のウィリアム・ターラー教授，同大学院生の大森恭子氏，また本学の狩野キャロライン助教授に衷心より感謝申し上げる。

最後に，本稿は，平成9・10年度における特別研究の成果であることをここに報告しておく。

注

1) G.M.Gould : *Concerning Lafcadio Hearn, George* W.Jacobs & Company, Philadelphia, p.116（1908）
2) 山口静一『フェノロサ』下，三省堂，p.143—144，（1982）
3) カール・ドーソン著，黒沢一晃訳「文化使節—日本におけるラフカディオ・ハーンとパーシヴァル・ローエル」『松蔭女学院大学研究紀要』36号（1995）
4) 3通のうち，［書簡3］については，その要旨に限って，筆者が『へるん』34号（八雲会，1997年）に発表している。
5) 『近代日本美術事典』，講談社，p.68（1989），および『高橋誠一郎コレクション浮世絵』第7巻，中央公論社，p.183（1976）
6) 市子。口寄せ，あるいは霊媒師の意。
7) ラテン語。“mirabile dictu”（語るも不思議）と同義だが，ここでは「不愉快」な気持ちを強調する意味で使用されたかと思われる。
8) 旧訳聖書の詩篇にあらわれる意味不明のヘブライ語。楽曲上の指示として「休止」を意味するものとされる。（*Kenkyusha's English—Japanese Dictionary*に拠った。）したがって，ローエルは“Good Bye”の代わりに用いたものと思われる。
9) 原題はGlimpses of Unfamiliar Japan。平井訳では，『日本瞥見記』とされている。本稿では，引用部分については原則として平井訳を用いた。
10) 小泉八雲著／平井呈一訳『日本瞥見記』下，恒文社，p.413—414（1975）
11) 前掲書，p.421
12) 『日本民俗宗教辞典』，東京堂出版，p.86—87（1998）
13) 前掲書，p.87
14) Percival Lowell, *Occult Japan*, Houghton Mifflin & Company, Boston and New York, p.343—344（1895）
15) メイスン（William Benjamin Mason, 1853—1923）は，1875年日本政府に招かれて来日し，最初，長崎電信分局のオペレーターとして赴任。その後，東京電信学校や第一高等学校で，電信技術者の指導や英語教師として活躍した。

(『来日西洋人名事典』，日外アソシエーツ，1995）また，ハーンからの文通は1892年5月28日から1893年9月27日まで行われたことが確認されている。

16) *Japanese Letters* (The Writings of Lafcadio Hearn vol.16, edited by E. Bisland,) Houghton Mifflin Company, p.285 (1922)

17) ローエル著／川西瑛子訳『極東の魂』p.154，公論社，(1984)

18) 前掲書，p.156

19) 『国史大辞典』第14巻，吉川弘文館，p.438 (1994)

20) 佐藤利男「米人パーシヴァル・ローウェルの神宮参拝」『瑞垣』107号，神宮司庁，p.76—77 (1975)

21) 『ラフカディオ・ハーン著作集』第14巻，恒文社，p.487 (1983)

22) 前掲書，p.569

23) 1891年5月付，チェンバレン宛書簡。『ラフカディオ・ハーン著作集』第14巻，恒文社，p.405 (1983)

24) 1895年2月付チェンバレン宛書簡などにみられる。

25) たとえば，1891年5月付，1893年1月14日付チェンバレン宛書簡などにみられる。

26) 里見繁美「ハーンとローエル」『ラフカディオ・ハーン再考』所収，恒文社，(1999)

27) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.15, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, p.353—354 (1922)

28) ハーンとアジア協会との関わりについては，銭本健二「ラフカディオ・ハーンと聖者伝説」『山陰地域研究』第2号 (1986)，および小泉凡『民俗学者・小泉八雲』(恒文社，1995) p.196—199にくわしい。

参考文献

1) 横尾広光「パーシバル・ローエルと日本文化論」『杏林大学医学部教養課程研究報告』第4巻 (1977)

2) 宮崎正明『知られざるジャパノロジスト：ローエルの生涯』，丸善ライブラリー (1995)

3) Percival Lowell, Esoteric Shinto, *Transations of the Asiatic Society* vol.21, R.Meikle john Company,Yokohama (1893)

4) 楠家重敏『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』第3章，雄松堂出版 (1986)

(平成11年10月29日受理)